民俗学

１３．（とりあえずの）まとめ

菊地暁

＊「私（たち）」が「資（史）料」である。

＊「日常」や「人々」を軽んじてはいけない。それらを軽んじる者を信用しないほうがいい。

＊（学問的）「概念」「方法」「理論」は「道具」である。

＊「事実」は「一般的」だろうが「例外的」だろうが「事実」である。

＊「日本」は（も）「広い」。

＊古今東西貴賤男女、人々の生き方、くらし方は多様であり、かつ、相応の存在理由がある。

＊ただ、かつて存在理由のあった生き方、くらし方が、いまなお存在理由があるとは限らない。

＊ヒトは「中途半端に賢い生き物」である。

＊ヒトの能力と欲望の間にはギャップがある。そのギャップに「呪術／宗教」や「ものがたり」が発生する。

＊「中途半端に賢い」のは（おおむね）「ことば」のはたらきである。その「ことば」とは「恣意的」だ。

＊「ことば」のはたらきが「しきたり（ルール）」を可能にする。

＊「しきたり」は「自然」に制約されない。なので、しばしば自由に展開し、時に、ヒトの生存を疎外する。

＊そうした「しきたり」の一つが「資本主義」。それは利便とともに多くの「生き辛さ」ももたらしている。

＊「生き物の時間」と「資本の時間」は違う。

＊そして、ヒトは「中途半端に賢い生き物」としてこれからも迷い続ける。

＊人々の来し方行く末を身の回りの生活事実から考え直す「民俗学」は、「迷い方」の一つかもしれない。

＊「民俗学」は「学問分野 discipline」ではないのかもしれない。それでかまわないのかもしれない。

『柳田国男集』29.

政治教育の為に

日本民俗学二十五回連続講習会開会の辞

この講習会は、日本としても最初の企てゞあります。将来多分は大阪の歴史の上に、記念せられる出来事の一つとなるであらうと思ひます。其会場には、他にも適当な場所を世話しようと、親切に言つて下さつた方もありましたが、我々はなほ是非ともこの懐徳堂でなければならぬと存じまして、無理に願つて爰を拝借することになりました。懐徳堂の由来に就いては、皆様の方が私よりもよく知つて居られます。是はこの大都市に於ける、平民の学問の発祥地なのであります。国中有数の家庭の子を集めて、未来の学者を養成しようといふ事業では無く、弘く一般の市民に時世を見るの明を与へ、単に字を識り書を読む能力以上に、物の道理のわかる人を、出来るだけ多く造ることが、創立者の意図でありました。私などはこゝを去ること三十里の土地に、竹山履軒二先生の時よりは、又三代も後に生れた者でありますが、やはり此因縁の下に、間接に深い感化を受けて居ります。社会に尽さうとせられた前賢の遺蹟は継がなければなりません。現代の教育は大いに進みましたけれども、なほ幾つかの求めて未だ備はらざるものがあります。さうして日本民俗学の如きは、まさしくその重要なる一科目であります。

歴史は以前の世の中に於ては、明君賢相の学問と認められて居りました。所謂草莽の士の地位も権能も無い者が、たまたま其知識を修得しまするとと、往々にして憂憤し、又危言しなければならなかつたのであります。ところが今や時代は一変致しました。歴史を万人必須の普通学と定められた朝廷の思し召しは、予めこの現代の政体に備へられたのであります。個々の政策は技術であり、又各人の考案でありまして、是が相競ひ相争ふのは、些しでも不思議なことはありません。それを判別し取捨するのが政治で、其権能は我々にも附与せられて居るのであります。はやく教育によつて正しい判断をする途を授けない限り、悪人で無くとも屢々失敗します。選挙が粛正を必要とするなどは、言はゞ一国の学問の恥であります。地理が我々の今居る場所を意識せしめる様に、歴史は今日が如何なる時であるかを、明確に会得せしむべき役目を持つて居ります。古今を一貫して変らないものは、実は歴史より上であります。人生の森羅万象は変つて止まず、又時とゝもに複雑になつて来る故に、之を学ぶ必要が愈々痛切なのであります。変らずには到底すまぬものがありました。それに伴なうてわざと変へなければならぬものも沢山にありますが、なほ其れ以外に不本意なる変化、もしくは改良の失敗とも名づくべきものが、見て行くとよほどあるらしいのであります。之を見究める方法を少しも知らないやうでは、安心して一歩でも、未来に足を踏入れることは出来ぬわけであります。如何なる方法が今日より以上に、この現世の疑問を解くことに有効であらうか。それを日本民俗学が考へて見ようとして居るのであります。昔が今で無いことを知るだけならば好奇心であります。今日の日本がどの点に於て、昔の日本とちがふかを具体的に学ぶことは、実際生活上の必要であります。

諸君をこの一つの専門に引込むことは、必ずしも自分どもの目的ではありません。目的は今まで世に知られて居る一通りの学科だけで、日に踏んで行く一国の生存が、支持して行けるといふ安心は出来ぬことを、明かにしたい為であります。若い一つの新興学問も、必要は既にあつて久しく欠けて居たもので、決して屋上に屋を覆ふやうな、余分の仕事で無いことを認めてもらひたい為であります。知識には一つとして無用のものは無いとは言ひながらも、其内にはおのづから緩急の差がある筈であります。我々日本人の埋もれたる前代生活の中から、眼の前の愁ひと悩み、今に解き終ほせないさまざまの疑惑の、起りを見つけ出さうといふ願ひなどは、特に需要の最も切迫したものかと思ひます。それを明かにする手段が、無ければ致し方もありませんが、玆に一つの有望なる途があると知つた以上、それを同胞に向つて熱心に説かうとするのは、当然の人情であります。諸君は冀はくは平静に講演者の言葉を味はつて、学問にまだ広々として未開拓の原野があり、人は是を耕し耘ぎることによつて、将来幾らでもより賢こく、従つて又より幸福になり得る見込があることを会得していたゞきたい。知識が人を寂しくし、又悲しませる時代はもう過ぎてしまひました。以前はそれを世に施す途が限局せられ、只今は既に自由になつて居るのであります。学問に対する若干の信頼、之に依つて人生を明朗ならしめようとする希望と計画、是が諸君に対する第一次の期待であります。二箇年各二十五回の連続講演は、大体に問題の全幅を蔽ふに足ると思ひますが、なほ聴衆の意向によつて、変更増減をすることも可能でありますから、どうか段々と御懇意になつて、遠慮の無い批判や御注文を、承はるやうにしたいものだと思つて居ります。（大意）

【編輯者附記】 以上の文は柳田国男先生に乞ひ去る九月十九日、別掲の日本民俗学第二十五回連続講習会に於ける、御講演の大意を御筆録願つたものである。

『近畿民俗』第一巻第五号、昭和一一年一一月一日、近畿民俗学会